

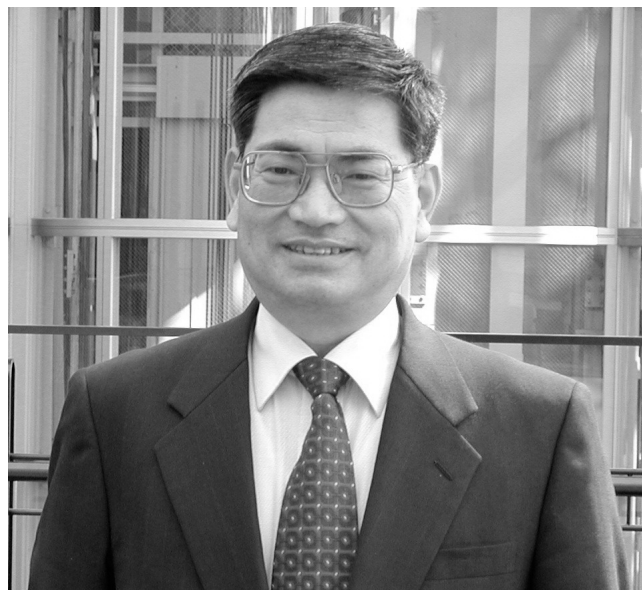
巻頭言

日本計算数理工学会 会長

西村 直志

ご承知のように、本会の創始者であり初代会長でもありました田中正隆先生は、2009年12月9日にご逝去されました。当会の会員にとって田中先生は特別の存在であり、頼りになる指導者であると同時に、皆から慕われる存在でもありました。田中先生のご逝去は私どもにとって計りしれない損失です。ここにご冥福を祈りたいと存じます。

田中先生のご略歴を振り返って見ますと、昭和43年に大阪大学工学部機械工学科を卒業、同大学院機械工学専攻博士後期課程を修了の後、大阪大学工学部・助手、昭和50年2月から昭和51年11月までフンボルト財団奨学研究生としてドイツ・シュトゥットガルト大学に留学、その後、昭和58年に信州大学工学部助教授を経て、昭和62年から平成20年まで同教授を勤められました。連続体力学、固体力学、計算力学の幅広い分野に業績を残しておられますが、田中先生の最大のご功績は言うまでもなく境界要素法のご研究とその普及へのご尽力、さらには境界要素法を中心とする計算力学手法の



逆問題への適用であったと思います。これらのご業績に対して、1996年度日本機械学会計算力学部門業績賞、1997年度日本機械学会会員功労者（創立100周年記念表彰）をはじめとする多数の賞が授与されています。また、機械学会理事、評議員などの要職も勤められました。さらに先生が主催されました国際会議「工学における逆問題に関する国際会議」(ISIP)は1992年から2003年までの長きにわたって逆問題の中心的な研究集会であり続け、アジアの計算工学の研究者を集めて始められたICOMEは昨年は南京において開かれ、今回は日本での開催が検討されています。

先生は当会の前身である境界要素法研究会を1983年に設立され、2007年まで会長を勤められました。同会は2000年より日本計算数理工学会と名を改め、以後境界要素法を一つの柱としつつも、より広い研究対象を包含する研究団体として活動を続けております。しかし、何といたっても田中先生と言えば境界要素法であり、境界要素法は先生の人生を賭けた大テーマであったと思います。私が田中先生にお会いしたのも境界要素法の研究を通してでした。かつての関西には材料学会を通して機械・建築・土木など力学に関わりのある研究者が集まって交流する気風がありました。当時田中先生は阪大の助手であり、境界要素法の一大ブームのなか、この方法で世界のトップに躍り出ようとする気迫に溢れておられました。一方、私は京大の学生で、小林昭一先生の下、1940年代から延々と続く境界積分方程式法の数理の研究の一端に繋がるべく、黙々と研究を続けてお

りました。自分のやっている境界積分方程式法が境界要素法と言うものと同じらしいということは Banerjee の本で知りました。昔からある境界積分方程式法を境界要素法と呼ぶ事には馴染めなかった当時の私は、境界要素法を標榜する人々には距離を置こうとしたものです。田中先生にもことあるごとに食ってかかり、先生の論文は間違っていると言う手紙を書いたこともあります。田中先生は丁寧なお返事をくださり、「まあ、完全でない部分もありますが、小さい事です」と若気の至りをたしなめて下さいました。その後も、思い出す度に冷や汗ものの毒気に満ちた論文をいくつか書きましたが、いつの間にか先生の教えがわかるようになって来たのか、境界要素法という名前にも違和感がなくなり、先生からも「西村さんも丸くなったなあ」と言っていただけになりました。

先生はとても気さくな方で、研究を離れますと、淀川より南の大阪人特有のいささが下品な話題を連発されました。それがちっとも嫌な感じがせず、まわりの人々は大いに楽しみました。人を傷つける事をされることのない思いやりのある方でした。しかし一旦研究の事になりますと、時として大変厳しいコメントをされ、縮み上がった覚えのある方もおられるのではないのでしょうか。思うに境界要素法を本当に大切にしておられたのでしょうか。しかし境界要素法は必ずしも広く受け入れられるには至らず、先生にとっては不本意な時期もあったものと想像します。先生がよくおっしゃるように境界要素法はよく切れる包丁で、一度その魅力を知ると他の方法では物足らなく感じられるものですが、一方、怪我をすると二度とそれを手に取ろうとしない人々も少なくありませんでした。ある計算力学の国際会議のバンケットで、いつも同じような人々が順に表彰される授賞式を横目に、少し飲み過ぎられた田中先生の寂しそうな様子をお見かけしたこともありました。

ある時、田中先生よりご病気の事を知らされました。確かに少し足元が危ういを感じていた所でした。先生はまだお元気なうちに、境界要素法を次の世代に引き継ごうとお考えだったのでしょう。ともかく私が会長をお引き受けすることになりましたが、それ以来、私どもが企画した研究集会に来ていただくことがとうとう出来ないまま、先生はご他界されました。いみじくも、先生のご逝去の知らせを受けたのは、先生が長年続けてこられ、今では計算数理工学シンポジウムと名を改めた、年末の境界要素法シンポジウムの準備をしている最中でした。

私たちは田中先生の残された日本計算数理工学会を受け継ぎ、境界要素法の伝統を守りつつも、新しい仲間を迎え、「数理」をキーワードに、計算工学の更なる発展を目指してゆく決意をしました。その節目となる本号を田中先生に捧げたいと思います。会員の皆さんがこれからも田中先生の作られたこの自由な研究交流の場で、研究活動を展開して下さいます事を願いつつ、巻頭の言葉と致したいと存じます。